

NPO法人

日本精神療法学会報

サマースクール37回特別号

第 181 号

発行 平成 26 年 9 月

発行所

長野県佐久市下小田切 338

N P O 法 人

日本精神療法学会事務局

印刷 P O 印刷

最も美しい時

学校長 松本文男

暑い八月も終わりに近づくとサマースクールに参加した仲間である子供諸君やその両親からの便りが、速達だったり一般だったり電話などでそして時には自然の家の上手な絵や私の似顔を興味深く画いて送付してくれる。

いずれも嬉しい限りであるが、三年行けなかった学校に行けるようになった。遭うのが怖い同組生に全く自然に語っている毎日。苦しいぜんそくがサマー以後一回も出ない。嫌でたまらない算数がすらすら楽しく解けるようになった。等々。の便りほんとうに喜びの声をあげたり涙を流して喜んでるところです。人間がこのように遅しく、素直に、明るくそして時に優しく変わってゆく。それもあの百名近い殆どが、こ

んな美しい時間をこの三十七年毎年与えられている自分達は世にも稀な幸福者と信じて疑った時はない。勿論犠牲的で、まっ正直な仲間の互いの協力があってのことです。半数を超える長野県

外の児童・生徒さんからは、二期期の始まりが遅いためこれからが本番といっても良い時期ながら嬉しい日々をお伝えして今回の稿といたします。すべての仲間よ、ほんとうに有難う。八月二十五日



清水川でのおべんと

サマースクールの持つ力

岐阜県瑞浪市 加藤優子

「先生には怒られ、友だちにはバカにされ、そんな学校に自分の居場所なんてない。」

「自分の存在がいらぬ。自分なんか誰にも必要とされてない。」

「死にたい、死にたい、と言うのが麻薬みたいにやめられなくなつた。」

火したかのようにあふれ出てくるし、学校に行っている子もその率直な思いを身近に聞いて、自分のことを話し出す。

サマースクール初日、今日初めて会ったばかりで、しかも初参加が五人中四人のグループなのに、子どもたちの口からはどんどん本音が出てくる。ここに至るまでの間、頭の中

分のことを話し出し、それを聞いていた他の子も自分のことをどんな話してくれる。そして、さっき話した子もつと自分のことを話したくなる。学校に行かれない子は、ためてきた思いがまるで噴

そんなせない時間とは対照的に、ひとたび遊び始めたならそれも止まらない。館内では、枕投げ・トランプ・「宝探しクイズアドベンチャー」の準備・体育館でスポーツとエネルギーいっぱい活動している。外に出れば、草も石も木も虫も、みーんな遊び道具になって、好奇心も止まらない。さあ発散の時から！のびのびと生き生きと自由に動く子どもたちの姿は、どの場面も

キラキラと輝いてる。

今回のサマースクールを泊まり込みで密着取材していたNBS放送取材班の皆さんも、一日目でもう驚きの連続だったようで、サマースクールの凄さを初日で実感されていた。

二日目の川遊び。虫が苦手な子も外に出て遊びながらなかつた子も、いつの間にか自然の中で、水の冷たさを肌

で感じ、足場の悪い岩場を果敢に歩き、川のせせらぎと鳥の声を聞きながらのお弁当タイムでは話さなくてもぼんやりしたいいい時間が流れる。夜の飯ごう炊さんでは、火おこしに苦労し、校長先生の登場で見事着火！又、料理好きの中学生Aさんが大活躍し、言わなくても自然に片付けまで黙々とやってくれる姿に感動してしまふ。みんな、力を合わせて作ったカレーの味は本当に格別

プールもいいね



で、おいしすぎて食べ過ぎちゃった。

お互いが歩みよりながら苦労し工夫した「宝探しクイズアドベンチャー」も大好評！本気で、感心しきつて「これは面白いねー。」と言ってもらえる喜びを、苦労した分みんなで味わえた。

そして、やはり二日目の夜も話が止まらな

い。「もめごとが嫌だから、その場の空気が悪くなるのを避けたいから、対する人によっていろんな顔をつくってる。そうすることをやめられなくなってる。」

「フリースクールも楽しいけど、やっぱり自分の学校に行きたい！」「いたわってるだけじゃ私の病気は治らない！」
こんなにも明るくて楽しくて優しさを持ったいい子たちが、こんなに

も生きづらさを抱えて日々を過ごしているという真実に胸が痛む。かわいくてまだあどけない顔の子どもたちが今苦悩しているのを目の当たりにすると、どうしようもなく怒りが込み上げてくる。大人たちは一体何を大切にしどこに目を向けて生きているの!!しかも、今の時代、相談の場も支援の手もそれなりにあるはずなのに!!

そして、取材のカメラがない時には、もつと心の底の本音が出てくる。「精神科に行っても治るとは思っていない。だって、本当のことなんて話す気にならないもん。」
そんな本音を話せるこの場とこの仲間に、子どもたちは心地良さを新

鮮さを感じてくれて、いつの間にか私のベッドに子どもたちが集まってくる。

三日目の山登り。登り坂の途中小学生のYちゃんが、「帰りたい、家に帰りたい、お母さんに会いたい！」と叫び出した。グループの仲間が集まり一緒に考えてくれる。頭を抱え込んでどんな言葉も入れようとしないうち、でも私もグループの仲間も折れなかった。「サマースクールは自由だしわがまま言っていいたいところだけど、そのわがままは違う！」と毅然としている中学生Aさん。「うちに待ってるお母さんだって帰ってきていいなんて思ってたんでなくてYちゃんにやり遂げて欲しいと思ってる、



大木だなぁ

Yちゃんだって本当に帰ればいいとは思ってないんじゃない！」と投げかけると、Yちゃんからこんな言葉が出て来た。

「やめちゃうのをやめられなくなっちゃった。」

そうなんだね、自分じゃどうしようもないことだったんだね。でも今はそんなYちゃんに寄り添ってくれる仲間がここにいるということを生懸命伝えた。泣きじゃくるYちゃんのこの本当の思いを、私もグループのみんなも聞くことが出来て良



山道も楽しい

かった。話してくれてありがとう、ますますYちゃんと一緒に登りたいし、明日までどんなことがあっても一緒にいたいと思えた。そして、Yちゃんは歩き出してくれた。グループ全員がホッと、とてもうれしかった。そして、グループ以外の子どもたちも二十人近くが山の中全員待っていてくれて、しかも誰一人として待たせたことに文句を言わない、他のリーダーさんたちも「よく頑張ったね。」とあたたかい言葉をYちゃんに注いでくれた。

歩きはじめて少しして私が、「頑張ってくれたね、やめちゃうのをやめられたね。」と話す、Yちゃんがこう言った。

「うん、でもやめちゃうのをやめられなくなっちゃった、そのこともやっぱり分かってほしいの。」

もう私は涙が止まらなかつた。どんなに悲しい思いをしてきたんだらう、いろんなことをあ

きらめることがどんなに悔しかったらう。Yちゃんだ

けでない、これまで、出会ってきた学校に行かれない子どもたちの苦しみがどんどん迫ってきて身体全体で、

泣けた。Yちゃんの歩く一歩一歩に感謝しながら下りにさしかかると、仲間と語り合いながらはずむように歩いていくYちゃんの姿があった。もう睡眠不足の疲れなんて吹き飛んでいくようだった。

午後は子どもも大人も楽しめるアスレチックや、拾った木とひもと安全ピンで作った釣り竿にうまい棒をえさにしてコイ釣り。その後はリーダーを池に落として大爆笑し、仲間もどんどん池に飛びこみ、木立に固まれて悠々と泳いだ時間は本当に楽しく幸せを感じた。

三日目の夜のキャンプファイアーの前、サマースクールベテラン組のお父さん(ニックネーム)が泣いている。

「帰りたくない。」

お父さん、お父さんとその存在をとても頼りにしていた仲間たちが、この時は泣き続けるお父さんの思いを感じてくれていた。そんなお父さんのありのままの姿を見て、人前では泣かないと決めていると話してくれた子がポツリとつぶやく、

「今日わたし泣いていいかなあ。」

部屋に帰ると、明日台風が来て帰れなくなればいいと、逆さまのてる坊主をいっぱい作っていた愛しい子どもたち。

あつという間にきてしまった四日目。最後までやっぱり池に飛び込んだ。素直に表現することができなくてこの四日間の子たちを怒らせてばかりいたHくんが、はだしのまま石の上を歩けなくなっていると、二つだけ年上のRくんが率先しておんぶしてくれた。Hくんのたまらなくうれしい顔とかっこいいRくんの姿が見ていたみんなの目に焼きついた。これがサマースクールだと感動した。

とうとうきてしまった閉校式。帰りたくない顔を突っ伏して泣いている子、なぜか呆然とし黙りこくる子、来年も来れるかもう心配でたまらない子、もつといたかったと悔しさをぶつける子、私の膝に乗っていた子が腕からみついて、ねじって、ひっかいて、噛み付いていった。腕は痛くなく、代わりに胸がぎゅーつと痛かった。どの子もたたくましくなり、顔も漂と変化していた。こんな私たちのサマースクールを追い続けていたNBS放送のプロジェクトリーダー、カメラマン、音声の三人も、四日目にはすっかり仲間になってくれていた。最後のインタビューを受ける時、この四日間のあふれる思いに包まれてやっぱり泣き出してしまった私とプロジェクトの東澤さんも一緒に感動し泣いてく

れた。すっかり参加者のように子どもたちとも遊んでくれた音声さん、本当は池にも一緒に飛び込みたかつたと話してくれた。カメラマンの吉川さんは、サマースクールから帰ると自分の子どもに対する接し方が変化し、子どもの表情が生き生きしてきたと感謝のメールを下された。そして、当初は学会の記録としてのDVD制作用の取材だったのが、三泊四日共に過ごしているうちに変わってしまった。

「こういうのが撮りたかった、ぜひ放映させて欲しい。」

サマースクールの思い出

長野市 小田切 一美

サマースクールが初めて開催された場所でもある県立望月少年自然の家で、第三十七回少年少女サマースクールが開催されました。グループの友達とどんな時間が過ごせるのか、不安と期待が入り混じった気持ちで初日を迎えました。初日はどこかきこちなさもありながら、少しづつ話をしたり遊んだりしながら仲間になろうと思つて過ごしました。次の日はみんなで出来るだけ自然の中で過ごしたい。校長先生にもお聞きしな

松本先生が三十七年間その身を削るような思いで続けて来て下さったこのサマースクールの本物さを、今年は特に強く感じずにはいられなかった。松本先生本当に本当にありがとうございます。事務局、保健室、北海道から駆けつけて下さるリーダーたちが、どんなに多くの心の支えになってくれていくかわかりません。最後に、参加者の子どもたちへ、来年またサマースクールで必ず会おうね!!

がら双子池へ行つてみようという気持ちが固まつてきました。

双子池までは登山口まで車で四十分、そこから池まで歩いて二時間弱の友達とどんな時間が過ごせるのか、不安と期待が入り混じった気持ちで初日を迎えました。初日はどこかきこちなさもありながら、少しづつ話をしたり遊んだりしながら仲間になろうと思つて過ごしました。次の日はみんなで出来るだけ自然の中で過ごしたい。校長先生にもお聞きしな

かありませんでした。途中、疲れてきたときには、木陰を歩くことで少しほつとした気持ちになりました。また道の脇に川が流れていて、水音が少し疲れを慰めてくれるように感じました。黒アゲハがひらひら舞っているのを見つけてちよつと気を紛らわす瞬間もありました。疲れると立ち止まっておやつを食べ、みんなで元気を出して歩きました。昨日、宿舍の周辺を散歩した時に見つけた木イチゴとは少し違った種類の木の実を見つけて、黒く熟れた実を選んで採りました。「これは今日の夕飯のデザートにしよう、他のグループの人たちにもあげられたらいいね。」と摘めるだけ摘みました。昨日、散歩の時に摘んだ木イチゴを、一つも無駄にしたくなくて他のグループの人たちにも食べてもらいました。そんなうれしさがK君の心に残っていたのかなと思えました。雨に降られながらも、何とかどこかにたどり着きたい思いでひたすら歩きました。しかし歩いてどこにもたどり着けな

いままお昼になり、食べているさ中に雨はきつく降り出してしまいました。急いで木の陰に入って雨宿りをして様子を見ましたが、雨脚は強く止みそうにありませんでした。全身に濡れている子を見ると、もう帰るしかない、ように思えました。みんなに、帰ることにしよう、と伝えて、雨の中を、来た道を歩きはじめましたが、本当に帰つてしまつていいのだろうか、もう少し頑張れるのではないかと、帰る道々、心が痛



木苺みつけた

みました。

山から戻ると、そのまま飯盒炊きんにかかりました。薪を運び火をおこす子、カレーの野菜を切る子と、それぞれ自分が出来そうなこと、やりたいことの役割につきました。火が思うようにおきてくれないので、燃えやすいものは何か考えて、木の皮や小枝を少しづつ足して、火が燃え移るのを見ながら工夫して、大きな火になるのを見守りました。カレーの鍋の水が少ないと水を汲んできて、おたまでひとすくいひとすくい水を足してくれました。炎が立って熱いので、うちわであおいで炎をよけてくれる子がいました。その脇で、アクをすくいだし野菜の煮え具合を確かめました。思い思いに、自然に力を合わせていました。木イチゴは、カレーの隠し味として入れました。みんなで作ったカレーは格別の味でおなかいっぱい食べました。

三日目、付近でクマの目撃情報があるの、山へ行く場合は、クマよけの鈴を持って、いくつかのグループが一緒に出掛けるように言われました。その日は、よつつのグループが誘い合って出かける為に玄関に集まりました。その時、「他のグループが出発してから五分したら出発する。僕たちだけで行きたい。」と言



うまく炊けたかな

う子がありました。クマの出没も心配でしたが、「僕たちだけで…」と言ってくれたことに感じるものがあって、私たちは他のグループの出发を見送り、しばらくしてから歩きはじめました。フィールド・アスレチックのひとつひとつをみんなで代わる代わる楽しみながらゆっくり進んでいくと、いつの間にか、先に行ったグループからは離れ、声も姿も見えなくなっていました。森の中でグループの仲間だけになると、なにか冒険が始まるようなわくわくとした思いになりました。ゆるい上り坂をゆっくり歩きながら、珍しいキノコや、虫が卵を産み付けたために変形した木の葉を見つけ、そのたびにみんなで頭をつき合わせるようにして見ました。大きな木の幹を行列を作っているアリの様子を気持ち悪がりながら見ました。うるのある古

い大きな栗の木に登ってみている子がいて、下から見ている以上に怖かったと教えてくれました。栗の木の周りでは変わったキノコを見つけ、グループのみんなに見せてくれた子がいました。可愛らしい形と色に感心しながらも、こういうキノコこそ毒なんだと言っている子がいました。

た。カラマツの木が並んでいる様子が見えたらY君が言うので見てみると、スツと立っているカラマツが幾本も重なって奥行きを生み出して、本当に美しいカラマツ林がそこにありました。疲れてリーダーにおんぶしている子がいると、Tちゃんがリーダーの荷物を黙って持つてくれてうれしさでいっぱいになりました。K君は、リーダーは大変だからみんなで担いであげると言って、本当にそうしようとしてくれました。「レイ君も来れば楽しかったのね。」と起きられずに残してきてしまったグループの子を思っている子もいました。森の中は、楽しみにあふれ、仲間を呼び合っている子も思いました。森の中は、楽しみにあふれ、いつの間にか助けあったり思いあつたりの連続でした。お弁当を食べはじめたとき、突然、ゴツツという音が近づいてきて、驚いてみんな顔を見合わせました。それは風が木々を揺らしながら渡っていく音だということがわかりました。雨が降るのではないかと気になって、お弁当を食べるのをやめる子もいました。森の中では、木の間から見える空模様や聞こえてくる音が何かを教えてくれることを感じました。薄暗い林があると、生き物が潜んでいる不気味さを感じられ、クマ除けの鈴を手

に持って一層大きく鳴らしてくれる子がいました。朽ちた木の幹の根元が大きく掘られているのを見つけた。これはクマがアリを食べるために掘った穴ではないかと思えます。穴の中にいた何かの幼虫にアリが群がっているのを見つけて、幼虫を助けようと木の枝でつついて水筒の水をかけてアリの撃退しました。林の道のわきの穴に、鳥の羽が混じった糞を見つけて、何か動物の糞だろうと、そういうものにも深い関心を持って教えてくれるのはSちゃんでした。Sちゃんは、生き物が命をつなぐためにほかの生き物の命をもらう必要があることをよく知っていて、無残な姿で死んでいる虫にも心を痛めている様子でした。突然、「シカだ。」と叫んだ子がいて、指す方を見ると、鹿が二頭走り抜けていくのを見えました。次々と起こる発見と感動が何ともいえないうれしい気持ちでした。

宿舎に戻ると、朝起きられなかったレイ君を誘って近くの池に遊びに出ました。池では即席の釣竿の先にお菓子を付けて魚釣りが始まりました。お菓子を池に投げ入れて、鯉が食べるのをみんなで面白く見ました。行きたい子どもたちでアスレチックにも行きました。朝はちょっと躊躇

していたTちゃんが高い木の階段をどんどん上っていました。レイ君が加わったことでアスレチックは一段と面白さを増していました。池に戻つてくると、魚釣りをしていた二人の男の子が池に入ってふざけて楽しんでいました。それを見た女の子二人がさっそく裸足になって、池の水に足をつけている姿がうれしかったのを思い出します。グループ全員がそろったので、夕食の時間ぎりぎりまで、その時を楽しみました。宿舎に戻るときには、明日は最後の日になるけれど、みんなで池に入ろうと自然に約束ができていました。

最後の日、あらためて今日の約束を確かめる必要もありませんでした。汚れてもいい服装に着替えて、部屋の片づけを早々にすませて池に向かいました。昨日は足しか水につけなかった子たちも、誰に促されるわけでもなく池に入って行きました。躊躇している私の背中をドーンと押してくれる子がいて、気が付くと濁った水の中に頭から浸かっています。最後はグループ全員が池に入つて、泳いだり飛び込みをしたりふざけ合つて、みんな、なんて素敵なお子さんたちなんだろう、みんなとこんな素敵なお時間を過ごしていること感激で胸がいっぱいでした。

一緒に過ごす中で、日頃、学校の先生に対して思っていることや夏休みの宿題がなかったらいいのとか、折り紙をしたいなとか、私は友達に自分から話しかけるのが苦手なんだとか、こんな夢があるんだとか、子どもたちの思いを聴かせてもらえることがとてもありがたい時間でした。そして、少しづつみんなの気持ち相近くなって、いつの間にか自分や相

癒しのサマースクール

前橋市 小見 幸 江

ナビ通りに進んでも迷子になる私は、すっかり下見をし、サマースクール当日を迎えました。ハンドルにしがみ付きながら内山峠を越え、望月の信号を曲がると一気に心がわくわくしてきました。自然の家を囲む森の佇まいに魅了されてしまいました。

たくさん集まってくれた子どもたち：なかでも初めて参加する子たちの不安と期待の入り混じった様子に「頑張ってくださいね！ たんだなあ」と思うとどの子も愛おしく大切にしたい気持ちで一杯になりました。

初日から子どもたちの解放されたエネルギーに圧倒され、その豊かで柔らかな発想に感動しました。私が持参した洗濯ロープをブランコに変えるため、枕や毛布を使い次々と「改良」して行きます。五年生のT君の提案を瞬時に察し、黙々と手伝う中一のR君と、小二のY君。完成したブランコに体重をかけ安全確認をし、最初にY君を抱え、乗せてあげるT君とR君の優しさ。初参加・初対面とは思えないほどの一致団結振りに胸の奥がきゅゅと痛くなる程の嬉しさを感じていました。

今年はどうしてもグループ全員でこの美しい森の中を歩きたい！と思っていました。「行きたくない、時間の無駄、何の意味があるの？」

と言われましたが、「どうしても、八グループの皆と山歩きに行きたいんだよ、行こうよお！無駄な時間かどうか行ってみないと分からないよ、どんな時間も皆と一緒に居たいよ！」と必死でお願いしてみました。「三グループが一緒なら行く！」と言ってくれた高一のMさんの言葉がきっかけになり、「じゃあ、行こう！」と意見が纏まりました。「ほんとに？行ってくれるの？やったあ！やったあ！、ありがとう、嬉しい！」



キャンプファイアー始まる

あまりの嬉しさに体中がゾワゾワと寒気立ちました。私は嬉しくて嬉しくて廊下をピョンピョン跳ね回りました。その私の喜び様に皆びっくりでした。こうして二日目も三日目も山中ハイキングを楽しめました。Y君と手ぬぐいで繋がり、しりとりをしながら歩くと、山の下から風が吹き抜けて行きます。「森の神様が頑張れ！って言ってるね」と励ましあいながら歩きました。R君は気が付くといつも最後尾の人に合わせ、ゆっくり歩き、止まれば待ち、置き去りにならない様にさりげなく気遣ってくれています。そんな皆を優しく包み込んでくれるような美しい森。何度も深呼吸してみました。

皆で目をしょぼしょぼさせながら火を熾し作った絶品カレー。マシユマロを焼く時、火傷をしないよう見てくれたMさん。私のハンカチの文字が可笑しいと、笑い過ぎて「お腹が痛いよお」とゴロゴロ転がっていた、五年生のMちゃん。

そして、グループ以外でも、昨年まではただすれ違うだけだった子たちが、今年は廊下でハイタッチしてくれたり、お腹をパンチしてくれ

たり、思い切り枕で私の顔を狙ってくれたりしました。「ああ、少しずつ私を認めてくれてるのかな」と嬉しくなりました。二日続けて今の気持ち話を話しにきてくれたF君。山の中を歩きながらたくさん話をしてくれたSさん。皆それぞれのやり方で、自分を解放し表現し、癒され新しい力をフル充電していく様でした。

「こうなったらいいな、楽しいだろうな」と思い描いていた事に、少しずつ近づけて来たのかな？と思えました。「ゆっくり、ゆっくり」とY君と言い交してきた言葉通りでした。明日が来るのが辛く、離れたくなくて最後の夜は皆の寝顔を見ながら泣けて仕方がありませんでした。「ゆっくりおやすみ」と呟きながら、一人ひとりの頭を撫でました。

涙の閉校式、子どもたちのお見送

仲間からの声

白馬村 下川 翔

サマースクールでは四日間の中で、グループの仲間の心の変化が見る事が出来ました。

最初の日、「帰りたい」と言っていた友達も、四日目の最終日には「帰りたいくない」に変わってしまう事が多くあります。

りを済ませると何だか心に大きな穴が開いてしまった様に感じました。振り返るとあの美しい森が全てを吸い込んでしまった様で、あの四日間は夢だったのかな？と思うほどの静けさでした。

たくさんの友だち、一緒に過ごしてくれてありがとう。力を貸して下さったたくさんのリーダーさんたち、事務局の方たち、お世話になりました。そして松本先生、私こそあの美しい森で子どもたちに囲まれ、癒されていたのだと気付きました。私を呼んで下さり、色んな事を見聞きするチャンスを下さいました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。Y君が言ってくれた「来年も八グループがいいなあ」の言葉を思い出しながら、「ゆっくり」じわじわ、幸せと充実感に包まれて岐路に着いた私でした。

今回は、私がリーダーを務めた第十グループでの出来事を話したいと思っています。

第十グループではリーダーの私を含め六名の仲間と共に四日間過ごす事になりました。

その中から高校生と中学生の男子に感想を聞かせてもらいました。

「今年のサマースクール九回目、昨年までは八ヶ岳でしたが、場所が変わり望月になりました。ですが自分はサマースクールに来ると子供達と接する時にどうすれば子供達が楽しめるかいつも考えるばかりでした。四日だけでしたが、子供達と接している時に楽しい気持ちになり一緒にしゃいで楽しんでいきます。皆が明るく楽しんでる姿を見ると自分も楽しくなったりして毎年いい思い出を作って帰ります。自分はサマースクールに行き子供達と接している時には何事にも広い心を持って接しないとイケないと思います。毎年サマースクールはいい思い出しか作れない場所です。」

(黒田優也君 高校一年生)

優也は私の一年目のサマースク

ルでも一緒にグループでしたが、本当に自分より小さな小学生をかわいがってくれます。本当に頼りになる優しい人です。

サマースクールの前日、彼から私にメールが来ました。「今年はお坊主で金髪なんでよろしく」といった内容でした。そのときは同じグループになるなんて夢にも思わず、当日彼に「同じグループだからよろしく!!」という「またカールかよ!!」(カールとはサマースクールでの私のニックネーム)と半分またか、という思いと半分照れながら嬉しそうに顔をしてくれました。自分より長くサマースクールに来てくれているだけあって彼をしよう仲間が多くいつも夜遅くまで仲間と話したり、カードゲーム等するので朝は眠い状態です。そんな中、彼にどこか行こうよ。と声をかけると最初は「眠い、行かない」というのですが、結局は「だるい、疲れた」と言いながら、付いてきて来てくれます。そして最終的には途中、「帰りたい」という小さい子供達をおぶって運んでくれたり、励ましてくれます。

私はリーダーとしても友人としても彼を頼りにしています。

さて、次は今回初めて参加した中学三年生の男子の感想を聞いてみまし

た。

「今回自分はサマースクール初参加で、内心ドキドキでバスに乗りました。ですが弟みたいな存在ができて、同い年の友達もできました。とても楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。」

(小早瀬拓哉君 中学三年生)

拓哉は今回が初めての参加でした。初日の夜、お風呂と一緒に入った際に、「自分のこと」を話してくれました。まだ初日でサマースクールという環境に戸惑っている中、短い時間ではありましたが、今まで苦しかったことを打ち明けてくれました。その後、ずっと彼は年下の子のバスケットボールの相手をしていていました。三日目には十二グループと一緒に、牧場に牛を見に行きました。その中で十二グループの女の子が案内の看板で見た温泉に行きたいという言葉で私を含む五人で温泉に行くことにしました。彼は連日のバスケットボールで血豆のきた足で私たちについてきてくれました。温泉に入りいざ帰還しようとしたときに彼が虫に刺されてしまいました。それに長時間リュックを背負っていたせいで脇に炎症が起こっていました。私は一応保健室に

連絡しましたが、迎えが必要か?との問いに対して、彼は「大丈夫、いらぬ」といつて帰りは登りばかりの道を途中小さい子を背負って歩いてくれました。帰った途端、また他の子にバスケットボールやっつと求められるなり、夕食や、お風呂の時間を除いてずっと動きまわっていました。また、その頃には同じグループの小学校四年生の男の子を本当の兄弟のようにお互い慕うようになり、四年生の男の子が、夜に昆虫を探しに行くことになれば、拓哉は付いてきてくれました。

他のグループの友達からも「拓哉変わったね!!」と言われるくらいに四日間の中で彼が変化していました。

他にも私のグループ、ほかのグループ含め多くの変化を感じることができました。

今年のサマースクールもリーダーに選んでいただき、ありがとうございました。

